

国際医療福祉大学大学院
医療福祉ジャーナリズム分野 修士課程1年生
(株)ツクイ 内部統制室 業務管理担当 課長
社会福祉士、内部監査士
金谷 勇歩 さんのレポート

「DIPEX JAPAN を介護従事者の教育に用いて」

◆前立腺がんの患者の意外な選択◆

介護支援専門員への職員研修会で、DIPEX JAPAN の前立腺がんの患者の語りの動画をみせたところ、参加者の多くが笑う印象的な場面があった。それは一。

インタビュー08の81歳の男性は、いつもの散歩道で体に疲れを感じ妻の勧めで受診してみると、前立腺がん末期の状態です。余命6ヶ月の診断を受けた。その診断を受け、この男性が一番最初に考えたことは参加者にとってとても意外なものだった。

それは、あと半年するとあの小さなお棺の中に自分はいれられるのだろう。その際、自分のからだを誰かが拭くことになるが、自分の足は水虫である。水虫の足を拭くのは嫌だろうなあ、申し訳ないなあと思い、この男性が最初にしたことは長年ほっておいた水虫の治療をはじめるといったものだったのだ。

この余命6ヶ月の前立腺がんの男性にとって最も気がかりだったこと、それは「人生の最後からからだを拭いてくれるひとに水虫で嫌な思いをさせたくない。」というものだったのだ。

この意外な選択に介護支援専門員たちは面食らい、思わず吹き出してしまったのだ。それはまさにこの男性にとっては「たいせつな終末期の生き方」であったのだろう。

◆介護における「当事者・体験者の語りに基づいたケア」とは◆

従来の医療のあり方であるABM（権威に頼った医療）やEBM（科学的証拠に基づいた医療）に対して、近年病気や障害を体験した人々の語り（ナラティブ）から学ぶNB（当事者・体験者の語りに基づいた医療）という新しい考えがある。

「エビデンス」と「物語」の出会い～医療福祉の新しい潮流と発展～の第2回目の授業でDIPEX JAPAN の存在を知ったとき、直感的に「これは使える！」と感じた。

医療だけでなく、介護の世界においても「利用者主体」というのは言葉ばかりで、家族や介護従事者側の意思でそのひとへの介護が提供されていることが多くみられるからである。

インフォームドコンセントの本来の意味である「利用者自身が納得して自らの意思で決定する」ということも、介護保険の指定基準には「介護従事者自身を主語とする説明と同意」が明記されており、「利用者を主語とした説明を受け、同意する」とはどこに

も見当たらない。医療の世界だけでなく、介護の世界も同様なのである。

ただし、医療が「治療を目的とする」ことに対して、介護は「生活の中で利用者の暮らしの支援を目的とする」ものであるため、利用者の暮らしには本人だけでなく、身の回りの家族、親戚、地域の知り合い、介護従事者などの多様な人々が存在し、これらの関係性は必然的に利用者の暮らしへ影響を与えるものと思われる。特に日本には独特の「家文化」があり、介護における利用者主体とは複雑な人間関係、力動の中で反映されてくるもののように思う。

◆利用者の語りに「これでいいんだ」と勇気づけられる◆

介護支援専門員は、利用者の意思を大事にしながらも家族や親戚などの意見、さらには介護従事者や介護保険制度のルールの中で、意見の調整を行い、常にこれでいいのかと思いながら利用者の支援を行っている職種だと思う。

DIPEX JAPAN のがん患者の語りの動画をみた介護支援専門員たちは、それぞれに感じ、考え、ある種の体験をした。

そこには、ハッとさせられたというより、矛盾の中で迷いながら利用者の声なき声に耳を傾けてきた姿勢に「これでいいんだ」という勇気を与えてもらったような姿である印象を受けた。

このDIPEX JAPAN のデータベースは、様々な可能性をもっているが、介護従事者の教育現場においても有効な教材であると思う。今後、認知症患者の語りがアップされた際にも継続的に介護従事者への教材としての活用をしていきたいと思う。